

■都市計画審議会での主な質疑・意見

意見の概要	意見	市からの見解
地域別の区域について	地域別まちづくり方針の区域を中学校区に変更した理由は？	<p>個々の市民の生活に寄り添ったものとするため、身近な市民生活の単位としての小学校・中学校区域を重視した。また、地域懇談会等の市のコミュニティ施策と整合を図るため中学校区域と考えた。</p> <p>なお、市街地の連続性を考慮し、それぞれ隣接する区域での整合が図れるよう調整している。(例えば日野駅周辺で、大坂上中と日野一中地区が隣接しているが、同等の位置付けをしている)</p>
大規模土地利用	土地利用転換に関しては早期に検討を始めるべきであり、条例で規定する3か月よりも早く届出を出させるべきではないか？大規模敷地の土地利用転換についてどのような位置づけを行っているか？	<p>本紙p.105『現在産業系の土地利用については、可能な限り継続していきます。社会情勢等の変化によりやむを得ず土地利用転換が行われる場合には、予め対話を行い、土地利用の方針を見出していきます。』としております。</p> <p>社会情勢が目まぐるしく変化する中で、その時代のニーズにあった土地利用とすることが必要であることと、その敷地がまちづくりにおいて特に重要なものであることを所有者がしっかりと認識していただくことが必要であり、日頃からの対話をすべき旨を位置付けました。</p> <p>また、まちづくり条例について、『今後は、事前の届出時期や説明を求める周辺住民の範囲、調整会議の運営内容等、これまでの成果を振り返り、必要に応じてその運用を含め見直しを検討していきます。』とし、引き続き検討を継続する旨を位置付けている。</p>
日野市版コンパクトシティ	日野市版のコンパクトシティとはどのようなものか？	<p>現行計画には丘陵部の住宅をたたみ、駅前に住み替えること等の一般的なコンパクトシティを目指すことについて記述されている。</p> <p>ただ日野市の将来人口推計でみると、急激な人口減少がないこと、人口密度、世代バランスの偏在化が想定されている。緑の多い丘陵部や災害の危険性がある場所の居住を避けつつ、住み慣れた場所で暮らしていけるような、交通施策や地域毎に生活利便機能を誘導すること等、都市計画による対応が可能なように位置付けている。</p> <p>市民がそこに住むことを選んだということを尊重し、地域で暮らし続けられるようまちづくりにおいてサポードすることが日野市版のコンパクトシティとしている。</p>

■市民まちづくり会議での主な質疑・意見

意見の概要	意見	市からの見解
記憶と歴史について	「記憶と文化」と表題があるが、歴史と文化とあるべきではないか。	<p>歴史は客観的に確認できるような、誰にとっても画一的な事実、記憶は市民一人一人がもっている想いといった主観的なものとして捉えている。まちづくりや都市計画においては、市民の暮らし方は多様であることが前提であり、多様な暮らしを支える環境づくりがまちづくりの目標であることを構成の方針としてきた。歴史を否定するものではないが、歴史のみによるまちづくりだけではなく、様々な切り口、観点があることを前提としていることから日野市まちづくりマスタープランにおいては記憶という言葉を用いることとしている。</p>
地域別の区域について	中学校区域によって圏域が分断されているように見えてしまう。	<p>個々の市民の生活に寄り添ったものとするため、身近な市民生活の単位としての小学校・中学校区域を重視した。また、地域懇談会等の市のコミュニティ施策と整合を図るため中学校区域と考えた。</p> <p>なお、市街地の連続性を考慮し、それぞれ隣接する区域での整合が図れるよう調整している。(例えば日野駅周辺で、大坂上中と日野一中地区が隣接しているが、同等の位置付けをしている)</p>
日野市版コンパクトシティ	コンパクトシティから日野市版のコンパクトシティに舵を切ったのは大きな転換である	<p>現行計画には丘陵部の住宅をたたみ、駅前に住み替えること等の一般的なコンパクトシティを目指すことについて記述されている。</p> <p>ただ日野市の将来人口推計でみると、急激な人口減少がないこと、人口密度、世代バランスの偏在化が想定されている。緑の多い丘陵部や災害の危険性がある場所の居住を避けつつ、住み慣れた場所で暮らしていけるような、交通施策や地域毎に生活利便機能を誘導するとあわせて、都市計画等の可能なように位置付けている。</p> <p>市民がそこに住むことを選んだということを尊重し、地域で暮らし続けられるようまちづくりにおいてサポードすることが日野市版のコンパクトシティとしている。</p>
他計画との連携	公共施設等管理総合計画や公共交通の再編の計画と立地適正化計画は整合とってほしい	<p>いずれの計画も検討中であり、マスタープランも公共交通や公共施設に関する計画と密接にかかわっていることから、整合するように記述を行っている。</p>
都市計画の見直し	一度決定した都市計画の見直しについて記述したことは画期的なことではないか。具体的な事例を挙げることはできるか？	<p>例えば、都市計画道路3・4・1号線甲州街道について、計画幅員が15～16mであり、拡幅することが位置付けられているが、長期にわたり着手されていない部分がある。このような区間について交通量、歩行者数等から都市計画道路の在り方を検討している。</p> <p>他には、土地区画整理事業の万願寺第三地区や新坂下地区が昭和30年に決定されているが現状未着手の部分がある。今後は必要な基盤整備については地域発意の取組を支援しながら、代替のまちづくり施策を検討する。</p>
概要版の作成	分量も多く、文言についても表現も抽象的であったり、カナカナなどの専門用語も多く、分かりづらい	<p>専門用語に関しては用語集を付与する予定である。</p> <p>都市計画に関する方針についてのみ記述する他市のマスタープランと異なり、様々な分野を横断して記述していること、市民の声を盛り込んで作成していることから、他分野連携のとれた有機的な都市計画を実行でき、実践的な計画となっていることがメリットである。デメリットとして分量が多くなることもあることから、概要版を来年度作成することで対応したい。</p>